

キタンパ・イエシェーペル著

「リンチェンサンポ伝」中本の和訳（一）

井内真帆

リンチェンサンポ (rin chen bzang po, 958-1055) は、チベットの後伝 (チタル phyi dar) の初めに活躍した「ロチェン」(大翻訳師 lo chen) と称される翻訳師である。古代チベット帝国の末裔が建てたグゲ・プラン王国の王たちを施主として、数多くの經典の翻訳や西チベットの寺院の建立に携わった¹。本稿は、リンチェンサンポの単独の伝記として最初期に成立したキタンパ・イエシェーペル (khyi thang pa ye shes dpal) 著リンチェンサンポの伝記の中本「菩薩翻訳師リンチェンサンポの本生である難行の灯明, 伝記『水晶瓔珞』」(byang chub sems dpa lo tstsha ba rin chen bzang po i khrungs rab dka spyad sgron ma rnam thar shel phreng lu gu rgyud) の前半部分の和訳である³。

キタンパ著リンチェンサンポの伝記について

キタンパ著のリンチェンサンポの伝記には、広本と中本、さらに中本より若干内容が少ない、いわゆる略本が存在するが⁴、広本は現存せず、中本と略本のみが伝わる。略本に関しては、中本のテキストに「中本の伝記」(mam thar 'bring po) と明記されるのに対し、略本に「略本」(bsdus ba) という記述はない。略本と中本の間に内容に関して大きな違いは見られないが、中本が伝記の内容を 11 項目に分けるのに対し、略本は中本で見られる最初のリンチェンサンポに対する預言の項目がなく、全体を 10 項目に分ける点で異なる⁶。本稿では便宜上、内容を 10 項目に分けるテキストを略本、11 項目に分けかつ中本と明記のあるテキストを中本と呼ぶ。

まず、現在入手可能な略本と中本のテキストについて述べれば、略本には由来が明らかな以下の3種類のテキストがあり、由来が不明でかつ未完の写本の画像データ1点がBDRCのウェブサイト上(www.tbrc.org)で公開されている(タイトルは全て表紙のタイトル)。

ブ(spu)写本

略本A: *bla ma lo tsatsha ba chen po i rnam par thar pa dri ma med pa shel gyi phreng ba*. Tucci (1988: 103-121).

キル(dkyil)寺写本

略本B: *bla ma lo tsatsha ba chen po rnam par thar pa dri ma med pa shel gyi phreng ba*. 『リンチェンサンポ伝記集』no.6.

デプン寺写本

略本C: *bdag nyid chen po rin chen bzang po i rnam thar dka spyad sgron ma*. 『チベット歴史伝記全集』set 1: 431-441.

由来不明(未完)

略本D: タイトル不明. BDRC no. W4CZ1547.

略本Aは、G. トウッチが1932年に西チベットのキナウル⁸のブ⁸で入手したもので、19フォリオから成る。略本Bは、1977年にスピティ出身のドルジェツェテン⁹(rdo rje tshe brtan)という人物がスピティのキル寺所蔵の原本から筆写したもので、後で述べる中本Aを含む『リンチェンサンポ伝記集』の中に収録されるが、写本そのものは公開されていない。そしてその後しばらくして、チベット本土からもキタンパ著のリンチェンサンポ伝が見つかり出版されたが、それが略本Cで、略本Cはデプン寺のダライ・ラマ5世(1617-1682)の秘蔵書から見つかった。6フォリオから成るウメ字体で書かれた写本で、ペルツェクチベット文古籍研究室編纂で2010年に出版された『チベット歴史伝記全集』の1セット目に入っている¹¹。なお、以上由来が明らかな3種類の略本の内容には大きな違いは見られない。

一方、伝記の中本には、以下由来が明らかなものが3種類、由来不明なものが1種類あり、5点の出版物がある。

キル寺写本

中本 A : *byang chub sems dpa lo tstsha ba rin chen bzang po i khrungs rabs dka spyad sgron ma rnam thar shel gyi phreng ba lu gu rgyud*. 『リンチェンサンボ伝記集』 no.3.

由来不明

中本 B : 表紙タイトルなし . In Sa phud thub bstan dpal 'dan (ed.). *chags rabs gnad don kun tshang (An introduction to History, Monasteries, Casteles, and Buddhism in Ladakh)*. Leh. 1976 : 55-84.

中本 C : *byang chub sems dpa lo tsa ba rin chen bzang po i rnam thar bring ba dka spyad sgron ma shel phreng lu gu rgyud*. Chos dbyings rdo rje (ed.). *bod ljongs nang bstan*. 1990-1 : 134-150.

ブ写本

中本 D : *lo tshatsa ba rin chen bzang po i rnam thar*. De Rossi Filibeck (2003 : 330, no.654), 魏正中・萨尔吉 (2009 : 133-162).

ポタラ宮殿写本

中本 E : *lo tsatsha ba rin chen bzang po i khrungs rab rnam thar brin po ka dpyad rin chen sgron me*. 『ポタラ宮殿所蔵の伝記』 : 26-73.

まず、伝記の中本の中で長らく研究者に使用されてきたのは、中本 A である。中本 A は先の略本 B と同じく、『リンチェンサンボ伝記集』の中に収録されるキル寺所蔵の原本から筆写したもので、略本 B と同じく、写本そのものは公開されていない。一方、中本 A の出版の前年に発表された中本 B は、その由来は明らかではないが、全編にラダック出身の編者サブ・トゥブテンペルデン (sa phud thub bstan dpal 'dan) という人物による校訂の手が入っている¹²。また、中本 C は、チベット本土で出版されたリンチェンサンボ伝の最初であるが、

テキストの最後に「カンリワ・チューインドルジェ (gangs ri ba chos dbyings rdo rje) が原本と照らし合わせて出版した」とあるだけで、原本の由来については述べてない。なお、1996年にトディン寺 (tho lding)¹³ 建立千年記念の出版事業の一環としてインドのダラムサラから出版された『トディン寺建立千年記念リンチェンサンポ伝』は、中本 A とこの中本 C の 2 つを基に校訂したテキストである。中本 D は、58 フォリオからなるウチェン体の写本で、トゥッチが略本 A と同じくキナウルのプで入手したものであり、トゥッチがチベットから持ち帰った文献の目録である De Rossi Filibeck (2003) に記載があるが長らく公開はされていなかったが、Tucci (1988) の中国語訳である魏正中・萨尔吉 (2009) の出版に伴って写本の影印版が公開された。¹⁶ なお、中本のテキストの中で写本そのものを確認できるのはこの中本 D のみである。さらにその後、他の中本もチベット本土から見つかり出版された。中本 E である。中本 E は、2016年、ラサのセルツク古籍編纂室がポタラ宮殿所蔵の写本を基にテキスト入力し、活字本として出版したものである。¹⁷ なお、それぞれのテキストに大きな違いは見られないが、中本 A、中本 B、中本 C の 3 つのテキストでは見られる内容が、中本 D と中本 E 両方で欠落しているなど、若干の相違が見られる。¹⁸

成立年代と著者について

キタンパ著のリンチェンサンポ伝の成立年代については、中本の奥書に、「リンチェンサンポの四大弟子のひとりであるキタンパがリンチェンサンポ建立のトディン寺で著した」とあることから、著者のキタンパが実際にリンチェンサンポの直弟子であるならば、11世紀末頃までに書かれたことになる。¹⁹ しかしながら、実際にはキタンパの詳細について伝える文献が他にないため、年代を確定できないが、Tucci (1988: 28) や川越 (1981: 475)、川越 (2003: 196-202) が指摘するように、『テプテルゴンポ』や『カダム陽光史』、『ダライ・ラマ 5 世のチベット史』などの 15 世紀以降に書かれた文献がキタンパ著の伝記からの引用を行なっていることから、²⁰ 以上のような文献の成立以前にキタンパ著のリンチ

エンサンボ伝が成立していたことは明らかである。²¹したがって、著者については不明な点が多いが、キタンパ著のリンチェンサンボ伝は単独の伝記として最も早く成立した伝記であるということは間違いない。

リンチェンサンボ伝に関する先行研究

伝記に対する先行研究については、Gangnegi (1998) や川越 (2003)、『トデイン寺建立千年記念リンチェンサンボ伝』の序文(1-8)に詳しい。ここではごく簡単に述べると、伝記に対する研究は、トゥッチが略本 A をキナウルのブから入手し、1932年に原本の筆写本を *Rin cen bzañ po e la rinascita del Buddhismo nel Tibet intorno al Mille* (Roma 1932, 英語版は Tucci (1988)) において出版したことに始まる。そして1977年の中本 A の出版を受けて研究が本格的になり、Snellgrove・Skorupski (1980) においてテキスト校訂と英訳註が発表された。²²なお、中本の翻訳は英訳の他に、Roshan Anegikhunupa・Karuna phaun Deshan (1996) のヒンディー語訳と張长虹²³ (2013, 2014) の中国語訳もある。一方、国内では小林他 (2009) において伝記の要約が示され、川越 (1981, 2003) によってリンチェンサンボ伝に対する詳細な研究が行われた。特に、川越 (2003) は Tucci (1988) や中本 A 及び中本 B を用い、さらに他のチベット語文献も多く使用してリンチェンサンボ伝を詳しく解説している。

和 訳

凡 例

1. 和訳に際しては中本 A を底本とし、特に中本 D 及び中本 E とも比較した。
2. 中本 A, 中本 D, 中本 E のそれぞれのテキストにおいて記述が異なる場合は下線を引いて註に記した。
3. 中本 A, 中本 D, 中本 E のページ番号及びフォリオ番号を [] 内に示した。
4. [] によって意味を補った。
5. 見出しを () によって付け加えた。

翻訳師リンチェンサンポの伝記²⁵

(帰敬偈)

[E : 26] インドの言葉で [D : 2a] 「マハーグルラトナパドラナモ」
チベットの言葉で 「ラマで翻訳師のリンチェンサンポに礼拝します」

牟尼によって預言された法の蔵を保ち

牟尼の教えを明らかにする [D : 2b] すばらしい宝²⁶

衆生の暗闇を [照らす] [A : 54] 太陽と月 [の] 灯火のあり方
最上の大翻訳師の御足に礼拝します

その素晴らしいラマその人の

恩を後に思い出すためと

信仰の芽を生じさせるために

おっしゃったことを [D : 3a] 聞いたので

伝記の要点を書きましょう

(序文)

さて、[A : 55] その菩薩の伝記を僅かに書くに際しては、十一の項目から示すのであって、[それは以下の通り。]

- [1] その偉大な人が [D : 3b] どのように預言されたか
- [2] どのような家系であるか
- [3] どこで [E : 27] お生まれになったか
- [4] どこで出家されたか
- [5] どこで翻訳などを学ばれたか
- [6] どのラマと師から法を受けたか
- [7] 正法をどのように翻訳したか
- [8] 要所とツクラカン [D : 4a] どのように建立されたか
- [9] 二十一の小さな村をどのように法要されたか [A : 56]

[10] 優れた行をどこでされたか

[11] どこから空行に行かれたか

[1] (預言)

第一に、²⁷牟尼が預言したことについては

わたしが涅槃に入ってから

500 年が 7 回 (3500 年) 経ってから

[D : 4b] 鳥の顔を持つ比丘が現れて²⁸

私の教えを広める

ということがいくつかの顕教と密教の經典に預言されている。

[2] (先祖の家系について)

第二に、そのラマの根拠地は、²⁹グゲのカツエ (kha tse) のシュクウェルワ (hrugs³⁰ wer ba) である。氏族はカツエのユダ (g.yu sgra³¹) のシェン (gshen³²) の系統である。血統は 6 つの王統 (lha rabs drug³³) の中にある。ニマシュク (nyi ma hrugs) の系統で、[D : 5a] シクウォル (hrugs wor³⁴) という。[A : 57] 叔父はナーガ (蛇神) と関わり [がある] ので「ルソル (ナーガの呪術) 」(klu sor) とも [E : 28] いう。そこに 13 ある中から、祖父ユダトンツェン (g.yu sgra stong btsan) には 2 人の息子があって、兄は出家したけれども世帯をなしておられた。お名前を大僧正シヨンヌワンチュク (gzhon nu dbang phyug) といった。[D : 5b] 弟は大相ユトクダ (g.yu thog sgra) という。大僧正シヨンヌワンチュクには翻訳師など、息子と娘の 4 人がお生まれになって、[その] 家系はユダシェンポ (g.yu sgra gshen po) といい、リバシチエルパ (ri pa shi cer ba)、キュワンパ (kyu wang pa)、ロパクパ (ro pag pa) などが [A : 58] そうである。大相ユトクダには [D : 6a] 小翻訳師レクペーシェラプ (legs pa'i shes rab³⁵) などの 3 人の御息がお生まれになって、[その] 家系をユダチュンポ (g.yu sgra cung po) といい、サルワンパ (zar wang pa)、

シヨンカルパ (shon khar pa), マヤンワ (ma yang ba), ツアハンパ (tsa hrang pa) などがそうである。

[3] (出生地について)

第三に、お生まれになった所については、祖先のユダトンツェンの供養の地であるキュワン (kyu wang) のレーニ (rad ni)³⁶ という所で [お生まれになって], [D: 6b] 父上のお名前は大僧正シヨンヌワンチュク, 母上はチョクロサ・クンサンシェーラプテン (cog ro za kun bzang shes rab bstan) と [E: 29] いう。³⁷ そこに息子と娘が 4 人お生まれになって、長子シェーラプワンチュク (shes rab dbang phyug), 中間子リンチェンワンチュク (rin chen dbang phyug), [A: 59] 末子がヨンテンワンチュク (yon tan dbang phyug), 姉妹 (女兄弟) がクンシン・シェーラプツォモ (kun sring shes rab mtsho mo) という。大翻訳師は中間子リンチェンワンチュクである。[D: 7a] 長子シェーラプワンチュクは家を守り, 末子ヨンテンワンチュクは出家してトゥクレーチュング (thugs las chung ngu) に居られた。姉妹も沙弥尼になり, 密教の法などを学び, 成就を得て女性ヨーガ行者チューキドゥンマ (法の灯 chos kyi sgron ma) と称した。

菩薩 (リンチェンサンポ) が母上の胎内に [D: 7b] 居られた時, 母上の感覚には昼夜なく常に, 右肩には太陽, [A: 60] 左 [肩] には月, 頭頂にはトルコ石のくちばしと爪を持った金のガルダが, ささまざまな美しい声を発し, バタバタとはばたいている [現象が] 現れた。9ヶ月半の間お入りになっていたけれども, [母上は] 健康で身も軽く病もないなどの良い兆しがお身体にあった。³⁸ そして生まれる時, [D: 8a] その金のガルダが母上の頭頂から溶け込んで, 陰部から出現し, [E: 30] 母上 [の周り] を 3 回廻って天に去って行く夢を見た。花の雨も降って, [A: 61] そこにいた人たちも [そのガルダを] 成敗できない夢を見た。³⁹ 午の年 (958 年), 夏の終わりの月 (dbyar zla tha chung, チベット歴 7 月) の 10 日に降臨して, 母上がキュワンの細長い畑で水路をお造りになっている時, 僅かに [D: 8b] お身体 [の状態] が悪く, 畑の上の方に行くと, 実際に母上の右肩に孔雀が降りた。左にはホトトギスが降りた。頭頂にはオウム

が降りた。父上が「このような鳥たちはどこから来たのか」とおっしゃった時、3羽とも母上に溶け込んだ。その上、母上に痛みもなく [D: 9a] 生まれたのは、青い身体で鳥の顔と鳥の目があり、[A: 62] 右の手のひらに法輪の模様がある [子供] であった。

御歳 2 歳の時には「ア、アー、イ、イー」(サンスクリットの母音)とおっしゃって、地面にもそのように書いて合掌して笑っておられた。父上が「これは縁を持っている者だ」と [D: 9b] おっしゃったので、黄色い服を着て優婆塞をなさった。以上が菩薩(リンチェンサンポ)の [E: 31] 誕生のご行為である。

[4](出家について)

第四に、出家したことについては、親教師レクパサンポ (legs pa bzang po)⁴⁰ より御歳 13 歳で出家なさって、お名前もリンチェン [A: 63] サンポと命名された。註釈と一緒にあった『三百頌』(trisatakārikā) をすぐに [D: 10a] お心に留めた。⁴¹ 翻訳などの勉強をどのようになさったかということは、御歳 17 歳⁴² になって、ウッディヤーナから来たあるパンディタが、母上から小さな座を取って食べ物振る舞われた後に一冊のインドの良い書物を残していた。それを後で翻訳師(リンチェンサンポ)がご覧になって、[D: 10b] 「インドのこの書物の中には素晴らしい教えがあるだろうが、[わたしは] インドの文字を知らない」と思い、[A: 64] 下降の木陰で横になって居られる時、眠るや否や夢に、赤い肌で宝の冠と腕輪、足輪、[D: 11a] 布などで着飾った者が右手にはダマル(太鼓)を叩き、左手には [E: 32] 花の芯を手のひら一杯に持って目の前に来てこのように言った。

小さな虫が唾液で身体を縛るように
故郷に執着することは悪魔の罠に入る [ことである]
善趣と解脱を欲する人は
北のカシミールの国に [D: 11b] 行っても
インドの東西を川のように流れて⁴³

正法の海をチベット [語] [A : 65] に翻訳するとよい

という音(言葉)を言っていなくなった。[リンチェンサンポは]目を覚ますと身体中に汗をかいて水に入ったようになってしまった。そこで、お心も不安になり、同時にお心に悲しみが生じて家に向かった。そこで、[D : 12a]「わたしにはダーキニーによる〔このような〕預言があるので、今こそカシミールとインドに行かなければ、法と命の障りになる。行ったとしても地理をよく知らないで、父上と母上のお心を乱したならば、わたしにとって悪い習気を積むことになる」とお考えになった。悩みながら [A : 66] [D : 12b] 居られたのを母上が [E : 33] 息子のお顔をご覧になって、[顔色が] とても悪いのをご覧になり、「息子よ、病気なのか、なぜ顔色が悪いのか」とお聞きになると、先のダーキニーが預言したそのいきさつなどを父上と母上二人に詳しく話した。すると、父上と母上、兄弟姉妹⁴⁴たちは話し合いをなさって、そこで父上、「これ(リンチェンサンポ)を [D : 13a] 送り出さなければ法と命の障りとなる。送り出したとしても我々の心が碎かれるようになるが送り出す話し合いをしよう。カシミールに行くべきで、インドの東には今回は行かずにカシミールを廻れ」と言った。そして、自身の兄(伯父)のタシツェモ (bkra shis rtse mo) という優婆塞に [D : 13b] 道案内を頼んで、[A : 67] 御歳 18 歳の時、亥の年 (975 年)、穀物の収穫の時、600 ほどの貝とたくさんの財物を持って、母上の何種類もの食事と食糧を送って、ぼろぼろの衣服を着て [行った] [リンチェンサンポと伯父と] ニュンティ (nyung ti)⁴⁵ のモン (mon) の土地を知っている者の [D : 14a] 3 人が一緒に行った。[E : 34] 母上が正午⁴⁶まで付き添って行かれた。

(カシミールへの道のり)

キナウル (khu nu) からラホール (gar zha) を出発して行かれた時、托鉢をなさって旅をした。それから 1 ヶ月と 3 日でカリカ (ka ri ka) という村に着くと、ニュンティの同行者が [A : 68] 歩くのが嫌になり [D : 14b] 行きたがらなかった。そこで、自身(リンチェンサンポ)と従者(伯父のタシツェモ)の 2 人だけ

で行かれた。3日目の道中でマハーサンガラ (ma ha sang ga la) という大きな橋に着いた時、税金を欲して道を管理する野蛮な人の家が3軒あったので、[そこに] 貝を50与えて、その夜は心配しながらお眠りになった。その後(翌日)、早くからその橋を出発して行かれて、[D: 15a] 道の3分の2に至った時、伯父が重い病によって死にそうになり、ご自身(リンチェンサンボ)も絶望したようになって疲れて眠ってしまった。[A: 69] その時、出会うより死んだ方がましなような (shi skyid) 300人ほどの盗賊が来て集まっていた。[リンチェンサンボの] 夢に、[D: 15b] 以前のダーキニーが来て、[E: 35] 「息子よ、起きなさい。昨日の橋に仏教徒を好まない夜叉女がいて、病人(伯父)に危害を加えようとしていると思うが、[夜叉女を] わたしが阻止すれば病人は早く治るだろう。ここにいれば強盗がすぐ来てしまうので、違う道を行って三宝に [D: 16a] 請願しなさい」と言った。[そこでリンチェンサンボは] すぐに立ち上がって、病人(伯父)の手を [A: 70] 引いて請願しながら40歩ほど行って振り返ってご覧になると、先ほどの所に武器を持った強盗たちが着いていたが、[D: 16b] 三宝とダーキニーの加持によって見られることなく、正しい(予定の)道を行った。すると、病人も治った。強盗の恐れもなくなり、安心した。

安堵して喜びながら高い峠を出発して行って、3日ほどで何も食糧がないまま [D: 17a] 森の [E: 36] 下の方に行かれると、年老いた母と娘の二人が [A: 71] それぞれ米を積んで運んできたのと出会った。手を差し出して乞う身振りをなさると、[その母娘は] 4, 5把みほどを [リンチェンサンボに] 差し上げた。その米を煮て召し上がると [お身体も] 回復した。そこで、布施のお返し [について] おっしゃって、お心に、年老いた母と娘が [D: 17b] [自身の] 母と姉妹の代わりになって(代わりのように思えて)、礼として、来年に百ほどの仏塔を建てようとお考えになり、老女に「あなたの髪の毛の一部ほしい」という身ぶりをした。老女はとても心が清らかであったので、「あなたが必要ならば長い髪も切って持って来る」という身ぶりをした。そこで翻訳師は [老女に]、仏具 [を入れる] 袋 [A: 72] [D: 18a] の中に象牙でできた親指ほどの大きさの観音が居られるのを見せ、百の仏塔の例を見せた。ここに [老

女の髪を]混ぜるという身ぶりをなさると、老女は喜んで、髪の上から3分の2ほどの束を切って[リンチェンサンポに]差し上げ、礼拝して舌を出して[切った髪を]手に取り、これを切ると[自分には何も]ないという身ぶりをした。[E: 37][老女は]涙を流して[D: 18b]去って行った。[リンチェンサンポにも]慈悲が生じて涙を流されたと[後にリンチェンサンポは]おっしゃった。後に、カシミールに行かれた時、老女の髪の一部を混ぜ、百の多くの仏塔を建てた。

[5](翻訳を学ばれたことについて)

[A: 73]第五に、それから半日ほどしてカシミールの国境に着いて、あるパラモンの7軒の家に着いた。そこに1ヶ月ほど居られて、少しの日常会話を[D: 19a]学んだ。そしてある日の道で、木の下で人骨でできた笛を奏でる裸のヨーガ行者と遭遇した。すると、そのヨーガ行者は、ラマ(リンチェンサンポ)の御頭に笛を3回廻して森へ去った。後に聞いたところによると、成就を得た[D: 19b]ヨーガ行者のラトナシッディ(ratnasiddhi),[チベット語で]ドゥプトブ・リンチェンゴドゥブ(grub thob rin chen dngos grub)という人であった。「その[A: 74]時,[ラトナシッディは]私に加持をしに来たけれども、お顔がわからなかったことに強い後悔が生じた」と[後にリンチェンサンポは]おっしゃった。そして、さらに進んで行かれると、一匹の若い虎と遭遇した。[E: 38]すると、森から人骨の笛の音がして、その虎は道の端に外れて行った。先ほどの[D: 20a][ラトナシッディの]兆しと加持であるとわかって、強い信仰と敬意が生じたと[後にリンチェンサンポは]おっしゃった。そしてさらに進んで行かれると、たくさんの商人と遭遇し、托鉢をなさって米をたくさんお買いになった。その夜はその商人のところでお休みになった。次の日、それ(商人)に土地柄⁴⁷を良く聞いて,[A: 75]昼までに行かれて、カラチャクティ(ka la cag ti)という村に[D: 20b]着いた。最初、カシミールの子供たちがいて、「このような髭のない黄色い身体の人を見ても」と言われて見世物になってしまった。そして、ある年老いた在家の人に間借りをしてそこに何日

か居られた。

ある日、村の中心に托鉢に行くと、一人の年老いたバラモンと出会った。
[D : 21a][バラモンはリンチェンサンポの]御手の模様を見ると何も言わずに家に帰って、花で満たした一つの銀の香炉を捧げて礼拝し、懐から取って、
[A : 76]吉祥の言葉を[E : 39]たくさん言った。「あなたは何代ものの福德を積む者であって、縁のある人であるあなたが今生で[D : 21b]たくさんの法を知ると多くの有情のためになるだろう。後に完全な仏になるであろう」と言った。彼の名前はバラモンのシュラッターカラヴァルマン (dad byed go cha, śraddhākaravarman) という者であった。そして、パンディタ・グナミトラ (gūṇamitra) という五明に精通した優れた人が、500人ぐらいの若者に法を説いていらしかったのと出会った。以前にバラモン(シュラッターカラヴァルマン)が捧げた銀の香炉を花で満たして差し上げ、贈り物[A : 77]にして礼拝し、請願して、7ヵ月間翻訳を学び、文法学と論理学に精通するようになった。

カシミールの親教師ダルマシャーンタ (dharmaśānta) から比丘戒を受けて、金剛界の曼荼羅を伴った儀軌をお聞きになって翻訳された。それらなど、多くの法をお聞きになって翻訳された。『ヴァルナスートラ』(varṇasūtra) を著された。⁴⁹そして、東方に6日行かれて、タマラサンティ (tamalasanti) という街に非常に名高い五明に無明でないパンディタが居られるとお聞きになって、先のラマに別れを告げて行かれた。

[A : 78]小道で巡回している鷲の影のように速い一人のヨーガ行者と出会った。[その人は]神足 (rkang mgyogs) の縁を持っていると悟って、[ヨーガ行者の]御足を頭頂に取って(付けて)、「わたしは遠いところの者であって、旅を[続ける]ことができない。捧げものとして差し上げる乞食の残りがなくなると何もないので、大悲のお考えでわたしに神足の教えを下さい」と申し上げた。すると、[ヨーガ行者は]「あなたという遠い所の人に教えを与えるけれども、神足の教えはダーキニーの法であるので、加持と奉納供物[A : 79]なしでは与えない」とおっしゃったので、ヨーガ行者の従者として追隨した。[リンチェンサンポは]ピンダラ (bhindhara) という街で奉納供物の条件を取り、

完全に条件を満たして[神足の教えを]願うと,[ヨーガ行者が]「今与えよう」とおっしゃって加持と奉納供物をなされた。[ヨーガ行者が]礼として一枚の布を翻訳師[の]首に巻いて,身・口・意の3つをラマ(リンチェンサンポ)に差し上げると,⁵⁰「神足の如意」をご覧になって,タマラサンティという街に行かれた。

[6](カシミールのパンディタに法を受けたことについて)

第六に,都市タマラサンティの大パンディタ・シュラッターカラヴァルマンとお会いになって,[A:80][D:22a]法を受ける請願をしたので[シュラッターカラヴァルマンが]くださり,二年間,ヨーガタントラの成就法と口伝についてたくさんお聞きになった。『チャクラサンヴァラ』(*cakrasamvara*)の解釈,⁵¹『バガヴァッドアピサマヤ』(*bhagavadabhisamaya*)⁵²というタントラとその成就法などのタントラと多くの成就法をお聞きになって,翻訳もなされた。親教師ブツダシュリー(*buddhāśrī*)からもヨーガの補足と法をたくさんお聞きになって,⁵³大いに学ばれた。そして,故郷に帰る準備をなさりながら帰りたいて考えていると,[A:81][D:22b]夜,「チベットのある人が,海の島からたくさんの宝を見つけたけれども,如意宝樹が[E:40]あるのは残してあって,それは尊者ナーローパー(*nāropā*, ca. 1016-1100)の御手にある」という夢を見た。目を覚ましてパンディタ・シュラッターカラヴァルマンに事情を申し上げると,シュラッターカラ[ヴァルマン]は,[D:23a]「そのようであるならば尊者ナーローパーの御前に行くべきだ。彼は,一生一身において成仏できる法であるマハームードラー(大印)について多くをご存知だ」とおっしゃった。

そこで,[A:82]ラマの許可があったことと,成就の根本はラマのお言葉であり,夢も良いので行くべきだとお考えになって,[D:23b]北のプラハリ(*phullahari*)⁵⁴の寺,[チベット語で]ペルメトーゲーバ(聖なる花が栄えるところ *dpal me tog rgyas pa*)というところに行かれた。尊者ナーローパーとすぐにお会いになって,加持と教えを受けることを請願して,[ナーローパーが]お与えになり,共に深く生まれた全ての戯論を離れた真実の優れた教えなどの指示と

加持を [D : 24a] たくさんお聞きになった。そして、教えと加持が [A : 83] 終わった時、ラマであるナーローパーに別れを告げて [E : 41] 帰る道で、パンディタ・カマラグプタ (kamalagupta⁵⁶) と会って、教えをたくさんお聞きになった。故郷でご覧になったインドの書物の中に、「金の光を持つダーキニーの深い成就法」があり、[D : 24b] パンディタ (カマラグプタ) が [それを] ご存知であったので学んだ。そのダーキニーとは以前の預言のそれであって、それ以降 [ダーキニーと] 母と姉妹のように親しくした。

さて、カシミールで何年経ったか計算すれば、7年経った。[リンチェンサンポは] 「さあ、父母たちに会いに行こう」とお考えになり、教えなどを黄色の樺の木に書いてインドの書物を作って行きたいと考え、[D : 25a] 故郷で預言された時に「インドの東西を川のように流れる」ということを思い出して、経などをシュラッターカラヴァルマンのもとに置いてインドの東方に行かれた。以上がカシミールに居られて法を受けたことと翻訳をしたいきさつである。

略号及び文献の略称

BDRC Buddhist Digital Resource Center

P. 『大谷大学図書館所蔵 西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録』京都：大谷大学図書館、1930-1932.

『大谷大学図書館所蔵 西蔵大蔵経丹殊爾勘同目録』京都：大谷大学図書館、1965-1996)

『カダム陽光史』Bsod nams lha'i dbang po (1423-1496). *bka gdams rin po che i chos byung rnam thar nying mor byed pa i od stong*. In 『チベット歴史伝記全集』1-4 : 1-187.

『ガリ王統史』Gu ge mkhan chen Ngag dbang grags pa (b.14c.). *mnga ris rgyal rabs*. In R. Vitali. *The Kingdom of Gu ge Pu hrang: According to mnga ris rgyal rabs by Gu ge mkhan chen ngag dbang grags pa*. Dharamsala. 1996.

『ダライ・ラマ5世のチベット史』Dalai Lama Ngag dbang blo bzang rgya mtsho (1617-1682). *gangs can yul gyi sa la spyod pa i mtho ris kyi rgyal blon gtso bor brjod pa i deb ther rdzogs ldan gzhon nu i dga ston dpyid kyi rgyal mo i glu dbyangs*. 北京：民族出版社、1981.

『チベット歴史伝記全集』Dpal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang (ed.). *bod kyi lo rgyus rnam thar phyogs bsgrigs*. set 1. 西寧：青海民族出版社、2010.

『テプテルゴンポ』'Gos Lo tsā ba Gzhon nu dpal (1392-1481). *deb ther sngon po: The*

Blue Annals (*Śata-Piṭaka Series* 212). New Delhi: International Academy of Indian Culture. 1974.

- 『ドウルワリインタク』 *dul ba gling grags*. In *Sources for a history of Bon: A collection of rare manuscripts from Bsam gling Mnastery in Dolpo (Northwestern Nepal)* Dolanji: Tibetan Bonpo Monastic Center. 1972 : 114-140.
- 『トディン寺建立千年記念リンチェンサンポ伝』 Organizing committee for the Commemoration of 1000 years of Tholing Temple (ed.). *lo tsa ba rin chen bzang po i khrungs rabs dka spyad sgron ma rnam thar shel phreng lu gu rgyud*. Dharamsala. 1996.
- 『ニャンレル仏教史』 Mnga' bdag Nyang ral Nyi ma'i od zer (1124-1192). *chos byung me tog snying po sbrang rtsi i bcud*. ラサ：西藏人民出版社 . 1988.
- 『ネエンジョル仏教史』 Bu ston Rin chen grub (1290-1364) *rnal byor rgyud kyi rgya mtshor jug pa i gru gzhings*. In Lokesh Chandra (ed.) *The collected Works of Bu-ston*. vol. 11. New Delhi. 1968 : 1-184.
- 『バクサムジヨンサン』 Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor (1704-1788). *chos byung dpag bsam ljon bzang*. 蘭州：甘肅民族出版社 . 1992.
- 『仏教入門』 Bsod nams rtse mo (1142-1182). *chos la jug pa i sgo*. In 『サキヤ派全集集成』 第2巻 . 東京：東洋文庫 . 1968 : 318-345.
- 『プトン仏教史』 Bu ston Rin chen grub. *chos kyi byung gnas gsung rab rin po che i mdzod*. 北京：中国蔵学出版社 . 1988.
- 『ポタラ宮殿所蔵の伝記』 Ser gtsug nang bstan dpe mying 'tshol bsdu phyogs sgrig khang (ed.). *lo tsā ba rin chen bzang po dang/ lo tsā ba blo ldan shes rab/ chag lo tsā ba chos rje dpal bcas kyi rnam thar (gangs can khyad nor dpe tshogs*. 485). ラサ. 2016.
- 『マントウ仏教史年表』 Mang thos Klu sgrub rgya mtsho (1523-1596). *bstan rtsis gsal ba i nyin byed tha snyad rig gnas lnga i byung tshul blo gsal mgrin rgyan*. ラサ：西藏人民出版社 . 1988.
- 『リンチェンサンポ伝記集』 Rdo rje tshe brtan (ed.). *Collected biographical material about Lo chen Rin chen bzang po and his subsequent reembodiments: A reproduction of a collection of manuscripts from the library of dKyi monastery in Spiti*. Delhi. 1977.

参考文献

- 井内真帆 (2002) 「Rin chen bzang po 伝研究 mNga' ris における仏教復興運動について」(修士論文 大谷大学提出)
- 井内真帆 (2006) 「ベルツェク・チベット文古籍研究室編纂 『デブン寺所蔵古籍目録』:(新書紹介)」 『仏教学セミナー』 83 : 16-24.
- 井内真帆 (2021) 「皇帝家の失墜と仏教復興」岩尾一史・池田巧 (共編) 『チベットの歴史と社会』(上) 京都：臨川書店 : 28-49.
- 川越英真 (1981) 「Rin chen bzang po 伝研究」 『印度学仏教学研究』 30-1 : 31-36.
- 川越英真 (1982) 「Rin chen bzang po の生涯とその活動」 『文化』 46-1/2 : 44-73.
- 川越英真 (1983) 「Rin chen bzang po の翻訳リスト」 『印度学仏教学研究』 33-2 : 140-

- 川越英真 (2003) 「Rin chen bzang po 伝の様相」『東北福祉大学紀要』27 : 193-218.
- 小林暢善他 (2009) 『マンダラ蓮華 アルチ寺の仏教宇宙』東京 : 平河出版社 .
- De Rossi Filibeck, E. (2003) *Catalogue of the Tucci Tibetan Fund in the Library of ISIAO.* vol.2. Roma: Istituto Italiano per L'Africa e L'Oriente.
- Franke, A.H. (1914) *Antiquities of Indian Tibet. Part 1: Personal Narrative.* Calcutta: Superintendent Government Printing.
- Gangnegi, H.P. (1998) "A Critical Note on the Biographies of Lo chen Rin chen bZang po." *The Tibet Journal.* 23-1 : 38-48.
- Gu ge Tshes ring rgyal po (2006) *Mnga ris chos byung gangs ljongs mdzes rgyan.* ラサ : 西藏人民出版社 .
- Martin, D. (2008) "Veil of Kashmir: Poetry of Travel and Travail in Zhangzhungpa's 15th Century Kāvya Reworking of the Biography of the Great Translator Rinchen Zangpo (958-1055 CE)." *Revue d'Etudes Tibétaines.* 14 : 13-56.
- Namgyal Nyima Dagkar (1996) "gShen: the ancestral clan of Rin chen bzang po." *The Tibet Journal.* 24-2 : 45-59.
- Naudou, J. (1980) *Buddhists of Kaśmīr.* Delhi: Agam Kala Prakashan (reprint).
- Petech, L. (1968) *The kingdom of Ladakh c.950-1842 A.D. (Serie Orientale Roma vol.51).* Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Richardson, H. (1995) "The Tibetan Inscription Attributed to Ye shes 'od: a Note." *Journal of the Royal Asiatic Society.* 3 : 403-404.
- Roerich, G. and Altekar, A.S. (1959) *Biography of Dharmnasvāmin (Chag lo cā ba Chos rje dpal), a Tibetan Monk Pilgrim.* Patna: Jayaswal Research Institute.
- Snellgrove, D.L. and Skorupski, T. (1980) *The Cultural Heritage of Ladakh,* vol.2. Warminster: Aris & Phillips.
- Thakur, L. S. (1994) "A Tibetan Inscription by lHa la ma Ye shes 'od from dKor (sPu) Rediscovered." *Journal of the Royal Asiatic Society.* 4 : 369-375.
- Tucci, G. (1988) *Rin chen bzang po and the Renaissance of Buddhism in Tibet around the Millennium (Indo-Asian Literatures.* 348). New Delhi: Aditya Prakashan.
- van der Kuijp, L.W.J. (2018) "The Bird-faced Monk and the Beginnings of the New Tantric Tradition: Part One." G.Hazod and Shen Weirong (eds.). *Tibetan Genealogies. Studies in Memoriam of Guge Tsering Gyampo (1961-2015).* Beijing: China Tibetology Publishing House: 403-450.
- van der Kuijp, L.W.J. (2019) "The Bird-faced Monk and the Beginnings of the New Tantric Tradition: Part Two." *Journal of Tibetology.* 19 : 86-127.
- 魏正中, 萨尔吉 (共訳) (2009) 『梵天佛地: 仁钦桑波及公元 1000 年左右藏传佛教复兴』第 2 卷. 上海 / Roma : 上海古籍出版社 / Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente.
- 张长虹 (2013) 「大译师仁钦桑波传记译注 1」『中国藏学』2013-4 : 30-38.
- 张长虹 (2014) 「大译师仁钦桑波传记译注 2」『中国藏学』2014-1 : 31-41.

(令和2年度科学研究費20H01327による研究成果の一部)

- 1 帝国の末裔とグゲ・プラン王国については井内(2021)を参照のこと。リンチェンサンポ翻訳の全リストは川越(1983)を参照のこと。
- 2 タイトルの和訳は川越(2003:194)に拠った。
- 3 本稿は修士論文である井内(2002)において行った翻訳をもとに加筆訂正したものである。このリンチェンサンポの伝記は、筆写が大谷大学大学院修士課程在学当時、カンカル・ツルティムケサン先生(日本名は白館戒雲、現大谷大学名誉教授)にはじめて一対一で読んでいただいたテキストである。その後、先生には博士課程に進んでからも『カダム明灯史』や『一切宗義』の「カダム派の章」など、カダム派に関するテキストを中心に読んでいただき、現在に至るまで多くのご指導をいただいた。1942年に西チベットのシェーカル(shelskar)でお生まれになった先生は2022年で御年80歳を迎えられる。日本と同様に、チベットにおいても80歳は特別な年で、「ギャトン」(gyaston)というお祝いをするそうである。長年の先生のご指導に感謝を申し上げますと共にこの翻訳の発表をもってささやかではあるがギャトン及び傘寿のお祝いとしたい。

なお、本和訳の発表に当たり、再度、ツルティムケサン先生に不明な点をお聞きした。また、特に密教関係の用語について菊谷竜太特定准教授(京都大学白眉センター)にご教授いただいた。記して感謝申し上げます。
- 4 広本の存在は中本の記述(中本A:127)から明らかである。
- 5 中本A(127)
- 6 『トディン寺建立千年記念リンチェンサンポ伝』の序文(2)もそのように指摘する。
- 7 リンチェンサンポの単独の伝記で後世に成立したものとしては、Blo gros don yod (15c.). *lo tstsha ba rin chen bzang po i khrungs rab[s] nram thar brin po ka dpyad pa rin chen sgron me*, 著者不明 *lo chen rin chen bzang po nram par thar pa bsdu pa*, Blo bzang bzod pa (1922-1995). *lo tstsha ba chen po rin chen bzang po i nram thar dad ldan dge phel* の3つがある。Kuijip (2018:413) 参照。
- 8 プにはイエシェウー(ye shes 'od)の名が見られる石柱がある。石柱についてはThakur (1994)やRichardson (1995)による研究がある。
- 9 トウッチが1932年に入手した実際のテキストは1フォリオ4行の58フォリオであったという。Tucci (1988:53) 参照。
- 10 キル寺はスピティを代表するゲルク派寺院で、リンチェンサンポの第19代転生ラマ・テンジゲルサン(bstan 'dzin skal bzang, 1961-)が在住する。キル寺についてはFranke (1914:45-46)が最初に言及した。
- 11 略本Cは、唯一写本そのものが利用できるという意味で大変貴重である。略本Cの表紙には *phyi* と分類されており、他のダライ・ラマ5世の蔵書と同様、写本がダライ・ラマ5世代にデブン寺の外から持ってきたものであることがわかる。ダライ・ラマ5世の秘蔵書と出版物に関しては井内(2006)を参照のこと。

- 12 川越 (2003 : 194, n.14) を参照。
- 13 中本 C (150)
- 14 トディン寺はリンチェンサンボが 996 年に建立した寺院の一つ。中本 A (90) 及び『ガリ王統史』(53)。
- 15 Tucci (1932 : 53-58), 川越 (2003 : 193-194), Martin (2008 : 17, n.12) 参照。
- 16 訳者の一人である薩尔吉教授 (北京大学) にご教授いただいた。記して感謝したい。
- 17 『ポタラ宮殿所蔵の伝記』の解説部分 (1-3) 参照。
- 18 例えば, 中本 (76-79, 80, 93, 94-95, 99-100)
- 19 中本 A (127) には「四柱の弟子」(slob ma ka ba bzhi) の一人としてキタンパの名前がある。他の文献, 『ニャンレル仏教史』(465) と『ネエンジョル仏教史』(79b.6-7) にはキタンパと類似する名前としてキノルジュニャーナ (skyi nor jñāna) という名前が見られる。川越 (1981 : 34) 参照。
- 20 『テプテルゴンボ』(kha, 3b.2-4a.5), 『カダム陽光史』(43a2-43b2), 『ダライ・ラマ 5 世のチベット史』(79-80)。特に『ダライ・ラマ 5 世のチベット史』はキタンパ著の伝記から多く引用している。川越 (1981 : 473) 及び川越 (2003 : 196-202) 参照。
- 21 『カダム陽光史』と『テプテルゴンボ』はキタンパ著の伝記からの引用であることを明記しており, 『カダム陽光史』(43b2) には, 「御年 98 歳の冬の最後の月の 17 日, 婁宿の日に空行に行かれたとグゲのキタンパはおっしゃっている」とあり, 『テプテルゴンボ』(kha, 3b.2, 11a.6) は, 「ソンツェン [ガンボ] がお生まれになって 329 年経った土・男・午の年に翻訳師リンチェンサンボはお生まれになった。『彼は 13 歳になった時, 親教師イエシェーサンボ (ye shes bzang po) から出家した』ということがキタンパジュニャーナの書いた伝記に書かれている」と記す。川越 (2003 : 196-197) 及び Martin (2008 : 17, n.12) 参照。
- 22 Snellgrove・Skorupski (1980) の校訂テキストと英訳には中本 A と略本 B, 『リンチェンサンボ伝記集』no.5, スネルグローブが 1974 年にラダックのリキル僧院 (likir) で入手した複写本の 4 点が使われている。なお, リキル僧院のテキストは公開されていないが, 中本 A と内容が一致すると Snellgrove・Skorupski (1980 : 83) は述べる。Snellgrove・Skorupski (1980 : 83) 及び川越 (2003 : 194-195) 参照。
- 23 Gangnegi (1998 : 43) 参照。ヒンディー語訳の全文は BDRC にてスキャンデータが公開されている。BDRC no. WA3CN9692。
- 24 張长虹 (2013, 2014) は, 中本 A, 中本 D, Snellgrove・Skorupski (1980) の校訂テキスト, 『トディン寺建立千年記念リンチェンサンボ伝』の 4 つを基にしている。
- 25 中本 A は表紙のタイトルと帰敬偈の冒頭が欠落しているので中本 D に拠った。なお, 中本 E の表紙タイトルは *lo tstsha ba rin chen bzang po i khrungs rab rnam thar brin po ka dpyad rin chen sgron me*。
- 26 中本 A はこの部分から始まる。
- 27 中本 D には一貫して「第一に」や「第二に」という語句が見られない。

- 28 預言にある「鳥の顔を持つ者」という呼び名は、アティシャとの共訳である 'phags pa lag na rdo rje gos sngon po can rdo rje sa og ces bya ba i rgyud (P.129) の奥書にも言及される。Kuijp (2019 : 86, n.1) 参照。
- 29 中本 E : kha tsa.
- 30 Snellgrove・Skorupski (1980 : 85, n.3) によると、シュクウエルはボン教のウエルマ (wer ma) として知られる神の名であるという。また、リンチェンサンポ建立のタボ寺の入り口 (sgo khang) の南壁にシュクウエル出身と見られる比丘の名がある。Petech・Luczanits (1999 : 107) 参照。
- 31 敦煌文献 P.T.1089 に g.yu sgra の名前が見られる。张长虹 (2013 : 33, n.4) 参照。
- 32 シェンの本来の意味は僧や司祭の意で、宗教儀礼を行う人を指し、ボン教の開祖シェンラブミウォ (gshen rab mi bo) に繋がる氏族名でもある。Snellgrove・Skorupski (1980 : 85, n.3) 及び Namgyal Nyima Dagkar (1999) 参照。
- 33 『ドゥルワリインタク』(118) によると、6 つの王統とは、dmu gshen, shag, hos, dpo, rgya, gnyan を指す。Namgyal Nyima Dagkar (1996 : 45) 参照。
- 34 中本 E : na hrugs wer.
- 35 中本 B (56) では gcung となっている。
- 36 中本 D : skyu wang rad ni, 中本 E : klu wang rang ni. レーニは現在の西藏自治区札達 (ツァンダ rtsa mda') 県のティヤク (ti yag) 地区にある。Gu ge Tshe ring rgyal po (2006 : 293) 参照。リンチェンサンポの出生地については、『ダライ・ラマ 5 世のチベット史』(79) と『パクサムジョンサン』(358) は「ゲゲの地のニユンワムラトナル (snyung waM ratN ru) 」とする。川越 (1982 : 68, n.18) 参照。
- 37 チョク口 (cog ro) は、青海の西南のダム ('dam 達木) に拠った氏族で、古代帝国の王ティツクデツェン (khri gtsug lde btsan, 704-754) やティデソンツェン (khri lde srong btsan, 777-815) の妃もチョコク口の出身であり、キデニマゴン (skhid lde nyi ma mgon) の妃もチョコク口の家系であった。Petech (1968 : 16-17) 参照。
- 38 この内容は中本 A, 中本 B (57), 中本 C (135) には見られるが、中本 D 及び中本 E には見られない。
- 39 この内容は中本 A, 中本 B (57-58), 中本 C (135) には見られるが、中本 D 及び中本 E には見られない。
- 40 『テプテルゴンポ』(kha, 3b.2) や『マントウ仏教史年表』(73-74) は、イエシェーサンポ (ye shes bzang po) という人物から戒を受けたとする。
- 41 中本 B はここまでを第 4 番目とし、リンチェンサンポが 17 歳になってからを第 5 番目の始まりとする。第 6 番目の始まりは中本 A と同じ。
- 42 中本 E は 14 歳とする。
- 43 中本 A : byug, 中本 E : rgyugs. 『ダライ・ラマ 5 世のチベット史』(193) にこの偈の引用があり、rgya gar shar nub chu bzhin myul nas ni とあるので、漂泊する (myul) と訳をした。
- 44 中本 E : phyed zla.
- 45 中本 E : nyung te.

- 46 中本 E : dros phug. 「正午まで」の訳は Snellgrove・Skorupski (1980 : 87) に拠った。
- 47 中本 E : sa rgyud.
- 48 この内容は中本 A , 中本 B (64) , 中本 C (138) と中本 D には見られるが , 中本 E には見られない。
- 49 大蔵經に所収されるチャンドラゴーミン (candragomin, 7c.) 著の『ヴァルナストラ』(P.5769) はニマギェルツェン (nyi ma rgyal mtshan, ca.1260-ca.1330) 訳である。
- 50 この内容は中本 A , 中本 B (64-65) , 中本 C (138-139) には見られるが , 中本 D 及び中本 E には見られない。
- 51 シュラッターカラヴァルマンは , リンチェンサンポと最も多く翻訳をしたカシミールのパンディタで , 北京版チベット大蔵經に 43 点の共訳 (P.81, 112, 119, 2016, 2144, 2198, 2533, 2535, 2650, 2651, 2653, 2654, 2661, 2667, 2668, 2671, 2672, 2689, 2693, 2708, 2718, 2731, 2745, 2780, 3328, 3329, 3335, 3337, 3345, 3346, 3348, 3355, 3357, 3507, 3511, 3536, 4536, 4592, 4788, 4919, 5212, 5244, 5245) がある。シュラッターカラヴァルマンについて , 詳細は Naudou (1980 : 190-193) 及び川越 (2003 : 205-207) を参照のこと。『仏教入門』(314a.5-6) には , リンチェンサンポがカシミールに派遣された後 , シュラッターカラヴァルマンに追隨してチベットに帰ったとある。また , 『プトン仏教史』(201) にもリンチェンサンポによってシュラッターカラヴァルマンなどのカシミールのパンディタが数名チベットに招請されたとあるが , リンチェンサンポの伝記にはそのような記述は見られない。
- 52 P.2144
- 53 ブッダシュリーとの共訳は , 北京版チベット大蔵經に 5 点 (P.2049, 2163, 3339, 3460, 5876) ある。川越 (2003 : 207-208) はブッダシュリーシャーンティ (またはブッダシャーンティ) (buddhaśrīśānti/ buddhaśānti) と同一人物と指摘する。共訳としてブッダシュリーシャーンティの名が見られるのは北京版チベット大蔵經に 1 点 (P.2049) ある。
- 54 この内容は中本 A , 中本 B (65) , 中本 C (139) には見られるが , 中本 D 及び中本 E には見られない。
- 55 ナーローパーがいた寺院で , その所在は明らかでない。13 世紀にチベットからカシミールに行ったことで知られるチャク翻訳師 (chag lo tsā ba chos rje dpal , ?-1264) の伝記によると , ブラハリはナーレンドラーの北の森にあり , 当時 , すでに荒れ果てた状態であったという。Roerich・Altekar (1959 : 85) 参照。
- 56 カマラグプタとの共訳には , 北京版チベット大蔵經に 13 点 (P.789, 840, 2481, 2504, 2505, 2667, 2733, 3357, 4132, 5213, 5412, 5462, 5825) ある。

